

AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会・会報 第30号

空中回廊

この企画展は嘸めば嘸むほど[小川芋銭と珊瑚会の画家たち] / 会員のひろば / 講座ダイジェスト[小川芋銭の生涯と人となり] / 愛知県美術館コレクションから[街角でひろう宝物] / 友の会活動紹介



クルト・シュヴィッターズ《メルツ絵画52,美容》1920年

この企画展は 噛めば噛むほど 小川芋銭と珊瑚会の画家たち 新しき日本の美

2010年4月9日(金) から 5月23日(日) まで開催

小川芋銭は水墨画のみならず書・俳諧においても高い評価を得ている画家です。芋銭は画家としての足跡を珊瑚会での活動からはじめました。この会の活動をもとに近代日本画史上独自の芸術世界を築いていったのです。珊瑚会は、日本画を中心としながらも、芋銭のように洋画教育を受けた画家や洋画家たち、あるいは漫画家をも交えた個人的な交友関係をもとに、趣味と絵画研究の発表の機会をもったきわめて自由な交流の場でした。

この展覧会を通して木村定三コレクションの近代日本画のなかでも重要な位置を占める芋銭の作品に親しんでいただき、また当時の社会的な雰囲気も味わってください。

小川芋銭とは？

小川芋銭が生まれたのは1868年、明治元年です。1881年から本多錦吉郎の画塾で洋画を学び、また日本画や漢画も習得しました。1888年には尾崎行雄の推挙で『朝野新聞』客員となり、画業での収入を得るようになります。

1893年父の命で茨城県牛久村に帰郷し、農耕に従事しますが、創作意欲が冷めることはなく、各新聞雑誌に農民を主題とした風刺的な漫画や挿絵を投稿し続けます。この間幸徳秋水らの発行する『平



《小鰯網》1922年

民新聞』などに多くの挿絵や漫画、短文や俳句を掲載し活躍しました。

帰郷した芋銭が生活について何の心配もなく創作に打ち込めたのは1895年に結婚した妻きい(通称こう)の理解と働きがあったからこそでした。

1915年に珊瑚会会員となり、その第3回展の出品作が横山大観に認められ、1917年日本美術院同人に推されます。以後、院展に新南画風の作品を発表し続けました。農村・山水風景や河童を主題とした奔放な水墨画を数多く残しています。



《金太郎》制作年不詳

青年期の貴重な資料

芋銭は始め、挿絵や漫画を新聞に掲載するなどジャーナリズムの世界で活躍しています。当時の新聞はなかなか見る機会がありませんが、それらの多くを冊子にまとめた作品集が資料として展示されます。こうした挿絵類を通して芋銭の機知にあふれた表現と共に当時の世相を垣間見ることができます。

芋銭は心情的に社会主義という理想に共感して



《鳥貝から生まれる河童》1937年

いました。ですから社会主義が弾圧されていた明治・大正期も幸徳秋水の『平民新聞』に投稿を続けました。この縁で1908年（40歳）に初めて刊行した画集『草汁漫画』に秋水より謝意を寄せられています。『草汁漫画』は反響を呼び、『読売新聞』や俳句誌『ホトトギス』にも作品が掲載され、漫画の挿絵や表紙画家としての評価を確立しました。

作品のおもしろさ

まずは「河童の芋銭」と呼ばれる所以から。芋銭は牛久沼に伝わる伝説に興味をもち、河童をはじめとする不可思議な、人々の心に生きている生物たちの生態を描いています。水郷の生活伝承にあわせて表現し、独特の幻想世界を創造しました。魑魅朦朧とした、そしてどこかユーモラスな、芋銭を代表する河童の作品群を見ることができます。絵の雰囲気だけでなく、落款も楽しめます。どれほど興味深いかは、展覧会の会場で目を配ってみてください。



《若葉に蒸さるる木精》1921年

この展覧会では農本主義思想から農画工と自称した芋銭の膨大な作品群を一度に味わうことができます。さらに彼の俳人・書家としての人間関係や資料から、当時の文化人の思想や生活の雰囲気をお楽しみください。
(松下智子)

この記事は本展覧会を担当され鯨井主任学芸員へのインタビューを参考に構成しました。

特別鑑賞会(大ローマ展) 他館鑑賞会(明治村)/バックヤードツアー

特別鑑賞会(大ローマ展)に参加して

会期を通じて多くの人々が鑑賞した「大ローマ展」。開幕早々の1月14日(木)に特別鑑賞会が開催されました。

まずは12階の一室で大島学芸員の斬新で楽しい講義とスライドで予習。その後10階展示会場

に移動して、講義を振り返りながら感動を味わいました。大島学芸員のサービス精神満点の解説に会員の皆さんも大感激。大変寒い日だったにもかかわらず参加してくださいました会員の中から、6名の方の声をお届けします。

入会して1年、最後の月に特別鑑賞会を聴きに来ました。来期は是非もっと頻繁にやって来ることにしましょう。伺った知識をもとにこれから「大ローマ展」を楽しんできます。(Y・D)

展示の苦労話とスライド、とても面白かった。重さを支える台、地震に対応する台など疑問を丁寧に説明してもらえてよかったです。(塹江光子)



展示されている作品は本当に素晴らしいものだから、是非大勢の方に見て頂きたいと思う。担当された大島学芸員から、表には出ない展示に至る迄の苦労話(3tもある彫像、5m以上もある壁画等、その展示作業は大変だったということ。極めて貴重な作品には免震の装置がなされ細心の留意がされていることなど)と、ここまでこぎつけることができ大変感激した、とお聞きして、より興味深く鑑賞できた。(青芝光男)

大島学芸員による解説 展示に関わる苦労、彫像の裏話等、これ迄にない解説ですばらしかったです。(磯貝紀枝)



この展示会が始まるまで、ローマ美術についての知識があったわけではなく、特別な興味があったわけではありませんでした。しかし始めてみて作品に実際に対してみると、意外なほど興味深いものでした。美術は、科学技術のように時代と共に進化していくようなものではなく、人間の本質がそんなに変わらないものと同程度に、2千年前のローマと現代美術との間の差はないのかなと思ったりしました。(清水一男)

大島学芸員の大変わかりやすい解説のおかげで、「大ローマ展」が少し身近な存在になりました。ありがとうございました。(佐藤)

皆さんは特別鑑賞会に参加されましたか?特に夜の特別鑑賞会は、閉館した美術館で開催される、会員だけの贅沢な特権です。展示会場だけの参加も大歓迎。皆さんが参加しやすいよう曜日を変えるなど工夫していますので、今後も多くの会員の参加をお待ちしています。(平松章子)

他館鑑賞会（博物館 明治村）に参加して
10月25日、他館交流鑑賞会として、明治村を訪れました。今回は会員以外の同伴もだったので、私は妻と二人で参加しました。

案内して下さったのは飯田喜四郎館長と学芸員の井上さんです。正門から入場し、まずは聖ヨハネ教会堂を見学。次に訪れた西郷従道邸では、通常は入れない区域も案内してくださいました。暖炉の前の食卓では椅子に座ってもいいとのこと、すかさず妻と記念撮影しました。

他にも数か所の建物を案内していただきましたが、なにせ敷地は広大、すぐにお昼になってしまいました。残念ですがここで解散し、午後からは各自で見学になりました。レトロ趣味の私たちはもちろん閉館まで満喫し、久々のデートとなりました。

ちなみに明治村で、学芸員として採用されている職員は案内して下さった井上さんを含めお二人のみとのこと、県美術館と比べてかなり少ない人員で頑張っていると思いました。

私事で恐縮ですが、私と妻は昨年6月に、レ



トロな建築が気に入って名古屋市市政資料館で結婚式を挙げました。お話を伺うと井上学芸員もほぼ同時期に市政資料館で挙式された新婚さんとのこと、親近感を感じました。（森 健次）

バックヤードツアーに参加して
11月19日、古田学芸員に案内していただくバックヤードツアーに参加しました。

普段目に触れる機会のない美術館の舞台裏収蔵庫や作品修復の現場などを見せていただき、美術館を運営しながら作品を守っていく知恵と工夫と努力を感じることができました。

企画展の開催期間中でバックヤードは静穏な雰囲気でしたが、展覧会の直前直後は嵐が吹き荒れたような状態になるであろうことが想像で



きる空間でもありました。（中塚千佳）

講座ダイジェスト

友の会講座

「小川芋銭の生涯と人となり」

11月22日(日)13時30分～15時 芸文センターアートスペースEFにおいて、「小川芋銭の生涯と人となり」と題する講演会を開催しました。講師は芋銭の三男＝知可良氏の長男＝小川茂也氏です。茂也氏は4歳から13歳まで、芋銭の画室として建てられた牛久の住居にすみ、牛久の自然の中で生活し、芋銭のこう夫人とは身近に接してきた人です。

芋銭は慶応4年(明治元年)牛久藩(現在茨城県牛久市城中町)大目付であった父賢勝の長男として誕生。大変虚弱な子供でした。明治維新の廃藩置県により、



賢勝は帰農を決意し牛久に移住します。芋銭は小学校を卒業すると東京の小間物店の丁稚奉公に出され、画塾彰技堂に雑用係として住み込み洋画の修業をします。その後、老荘思想に共感した在野の農画工として次第に名を知られていきます。



大正6年、第3回珊瑚展が日本橋は白木屋で開催され、そこに横山大観が訪れ、芋銭の「肉案」に大変興味を示し、日本美術院の会員に推挙します。芋銭は50歳にして、日本美術院同人となります。

こう夫人は芋銭を支えた立派な人として語り継がれていますが、農業を全くしたことの無い知可良夫人にとって一緒に働く事は大変苦しい日々であったそうです。芋銭が旅行にいつも連れて行った犬田茂氏は「橋のない川」で有名な作家の住井すえ氏の夫で、家が近所であり彼女から茂也氏は大変可愛がってもらったそうです。

出席者は25名。アンケートでは「身内の方の話の聞く機会が得られたことは大変幸せでした」「身内の話を客観的に語られることに感銘を受けました」という声が聞かれました。(塹江光子)

愛知県美術館友の会は、団体も入会していただくことができます。現在ご入会いただいている団体は、名古屋芸術大学、株式会社MARUWAの2団体です。ご協力ありがとうございます。



名古屋芸術大学

大学院音楽研究科/音楽学部/人間発達学部

〒481-8603 愛知県北名古屋市熊之庄古井281番地
TEL:0568124-0315 FAX:0568124-0317

大学院美術研究科/美術学部

〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重沼65番地
TEL:0568124-0325 FAX:0568124-0326

大学院デザイン研究科/デザイン学部

〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重沼65番地
TEL:0568124-0325 FAX:0568124-0326



株式会社 MARUWA

〒488-0044 愛知県尾張旭市南本地ヶ原町三丁目83番地
TEL (0561) 51-0841
<http://www.maruwa-g.com>

株式会社 MARUWA SHOMEI

〒110-0015 東京都台東区東上野一丁目1番12号栗橋ビル
TEL (03) 5812-0870
<http://www.maruwa-shomei.com>

株式会社 MARUWA QUARTZ

〒963-7704 福島県田村郡三春町大字熊耳字大平7-1
TEL (0247) 62-0012
<http://www.maruwa-g.com>

愛知県美術館コレクションから 深く知ると、もっとみえてくる 街角でひろう宝物

(編)ここでご紹介する所蔵作品《メルツ絵画52,美容》を、本会報表紙に掲載しました。

身の周りにある広告や包装紙の切れ端、古い布、木片。それらを使って、絵の具やカンヴァスにとらわれない「絵画」を探してみよう。

生涯を通じてそのような挑戦をしてきた人物がいます。ドイツ、ハノーヴァー出身の芸術家、クルト・シュヴィッターズ(1887-1948)です。彼は1910年代末より、紙切れや古い切符、綿布、針金など身近な不要品を自在に貼付けて独自の絵画

彼はこの絵画を「メルツ絵画」と名付けました
を作り始めました。まさに第一次世界大戦が終わってすぐの頃です。戦争の傷跡がいたるところに残るドイツの街角で、シュヴィッターズは瓦礫の中から廃材を文字通り拾い集め作品としたのです。

それでは早速、表紙の作品《メルツ絵画52,美容》(1920)を見てみましょう。中央に身支度をする女性二人のイラストがあります。イラストの上部分に見えるのはフランスとスイスの狭間にあるサレブ山のロープウェーの切符、そして下にある青い紙片は煙草ゴロワーズの包装紙です。(今はパッケージデザインが変わってしまっていますが)他にも、小花柄の包装紙などが作品を彩っています。

彼自身の日常生活の中から、こうした素材は集められたのでしょうか。一見したところ無造作な印象を受けますが、全体がくすんだ茶色に覆われているためか、軽妙な手つきの中にどこかノスタルジックな優雅さも感じられます。



《メルツ絵画305,ロボジツ》1921年

ところで「メルツ」とは一体何なのでしょう。実は、作品制作に用いられた紙片にたまたま載っていた「Kommerz(商業)」という文字の一部分「Merz(メルツ)」からとられた言葉

だそうです。当然、この四文字にはもはや何の意味もありません。こうした偶然性、無意味さ、無秩序にこそシュヴィッターズは惹かれ、自身の創作活動に「メルツ」という言葉を冠したのでした。

また彼は平面作品にとどまらず、詩作をはじめとする様々な表現にも挑んでいます。中でも「メルツ建築」はとりわけ独創的なものです。彼は何年にもわたって室内に多種多様な素材石膏から車輪、鉄棒、さらには靴ひも、爪、義歯などを集めては立体化させていったのです。「メルツ」とはシュヴィッターズにとって、特定の美術様式どころか自らを取り巻く世界そのものだったのかもしれない。



メルツ建築,ハノーヴァー,1933年頃

こうした彼の活動は当時、ダダイズムや構成主義とゆるやかに重なりながらも、けっして美術界の中心に位置するものではありませんでした。また、ナチスから逃れるため亡命を余儀なくされ、晩年は孤独の中で制作を続けました。

けれども死後には、ネオ・ダダや、ヌーヴォー・レアリズム、アルテ・ポーヴェラなどの芸術運動が盛んになる中で、シュヴィッターズも再評価されることとなります。現在にあっても、日常生活にあふれる「ガラクタ」から一つの壮大な美的世界を作り上げようとするシュヴィッターズの行為は、そのユーモアと逞しさ、そして奇妙なロマンチズムによってあらためて私たちを魅了するに違いありません。

(学芸員 中村史子)

学芸員の横顔

中村史子(なかむら・ふみこ)

愛知県美術館学芸員

「アヴァンギャルド・チャイナ」展、「放課後のらっぱ」展などを主に担当。

去年、女の子を生みました。育児に、アートに奮闘しています。





AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

理事会から

愛知県美術館との座談会

定例の理事役員会の時間内では美術館側との意見交換が深まらないことから、さる2月4日に時間を確保して座談会を行いました。概要は以下のとおりです。

友の会が県美から独立した団体として活動することについて、今のところ良好な協同関係が維持されているので、今後もこの状態を継続したい。

サポートについて。県美としては、モニターや所蔵品保守管理のサポート活動に大変感謝している。特に後者は九州でも注目され、来訪・見学もある。

会員増への協力について。県美のファンになることを掲げているが、会員の満足感がなければファンも減ることを伝えた。県美からは特別鑑賞会や作家による展示説明等の充実により協力するとのこと。友の会も他館鑑賞バスツアーを企画していることを伝えた。

トリエンナーレとの関係について。友の会として盛り立てる具体策が漠然としていることを伝えた。県美からは年間2回に減った企画展の優遇減少に代わるものを考えているとのこと。

今後について。友の会としては、トリエンナーレに先立ち、あいちアートの森を訪れ、現代アートへの理解を会員に促す。

(友の会会長 油田弘佑)

友の会活動紹介

「日本の自画像」

- 10月 他館鑑賞会(博物館明治村)
- 11月 特別鑑賞会(昼・夜)
- 11月 バックヤードツアー
- 11月 友の会講座(小川芋銭の生涯と人となり)

「大ローマ展」

- 1月 特別鑑賞会(昼・夜)
- 2月 友の会講座(ローマ文化と美術)

定例活動

- 美術館モニター のべ4回
- 所蔵作品管理 のべ12回
- 所蔵作品...目録・調書・フォルダ・キャプション作成
- 木村コレクション...風呂敷コーナー付け
- 洗濯...さらし・手袋・風呂敷
- 備品...やわらの掃除・重し修理
- 発送 のべ2回
- 受付 のべ7回
- 会報発行 第30号発行
- ホームページ 随時更新
- 中面で紹介 裏面で紹介



特別鑑賞会

「日本の自画像」の鑑賞会は、若きフランス人の目による日本の戦後のとらえ方やプリントの違いなど、村田副館長を始め多くの学芸員さんに話を伺いました。若い方も参加され写真展への関心の高さを感じました。

友の会講座

名古屋大学の小川正廣教授による「ローマ文化と美術」の講演が2月27日、出席者43名で催されました。ローマ建国の歴史と宗教心、統治政策についてなど、文化・社会の面に新たな視点を加えた興味深い講演でした。



新企画 日帰りバスツアー 4月10日催行 参加者募集中!

県美術館の副館長だった木本文平さんが館長を務める藤井達吉現代美術館ほかを訪ねます。木本館長自ら解説して下さるほか、昼食もご一緒されます。お問い合わせは事務局まで。

これからの企画展のご案内

小川芋銭と珊瑚会の画家たち 新しき日本の美

4月9日(金) 5月23日(日)

あいちトリエンナーレ2010

8月21日(土) 10月31日(日)

田原市博物館の名品による 渡辺華山展

併設：和魂洋眼(所蔵作品展)

6月4日(金) 7月11日(日)

友の会入会のご案内

友の会の詳しい活動内容を知りたい方、入会をご希望の方は、下記までお問合せ下さい。

10階愛知県美術館受付

友の会事務局(火・木・金・土 10:00-16:00)

052-971-5511(代) 内線347

tomonokai@aac.pref.aichi.jp

編集後記 「空中回廊」の編集に携わせていただいていた数回ですが、制作することの大変さと喜びをともに感じています。この「空中回廊」が、芸術や文化が私たちの生活に、より身近なものとなるきっかけになることを祈っています。(大矢真美代)

- 編集 小林 克敏/水野 愛子/大矢 真美代/平松 章子/松下 智子/宮崎 玲子/森 健次
- 協力 愛知県美術館
- 発行 2010年3月 愛知県美術館友の会
- 〒461-8525 名古屋市東区東桜一丁目13-2 愛知芸術文化センター内
- TEL: 052-971-5511(代)内線347
- FAX: 052-971-5617
- E-mail: tomonokai@aac.pref.aichi.jp
- 美術館ウェブサイト: http://www-art.aac.pref.aichi.jp